

西堀栄三郎著 『南極越冬記』

別の項で南極観測のことに触れたが、日本隊初めての南極越冬の記録に触れない訳にはいかないだろう。別項でも書いたが、何しろ私の南極への夢・幻を掻きたてたのは本書であったのだから。田舎の高校生の時、学校の帰りに「蛍雪時代」などという受験雑誌を買いに本屋に立ち寄ったものだが、たまたま本棚の隅にこの本を見つけ、家に帰るなり「蛍雪時代」などはそっちのけで読み耽ったものだった。受験雑誌などが面白くないのは当然で、山奥の田舎で百姓社会しか知らなかった少年には想像もつかないような南極観測という大事業が行われていること自体が驚きに満ちたものだった。

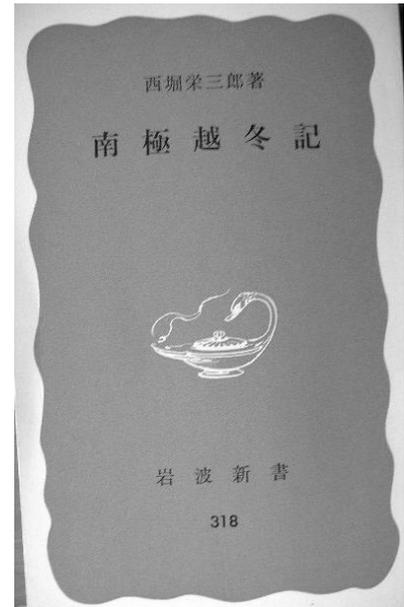
当時は山の世界でも海外遠征が緒についた頃で、南極男は殆どが山男から選抜されたが、山のエキスペディションは長くても3ヶ月くらいなのに比べて、南極観測は越冬も含めると1年間に及ぶ極地生活を余儀なくされた訳だし、また、機構組織も学術会議を頂点とした大規模なものであったから、現場の越冬隊長としてその間の調整やら何やらにも慣れない神経をすり減らしただろうことは想像に難くない。

この本は、初めての越冬隊11人が「宗谷」から降ろされて、越冬物資の運搬、昭和基地の建設をするところから始まり、全て手探りの南極越冬生活の後に再び「宗谷」に収容されるまでの1年間を、著者の現地でのメモをもとに日記風に纏めたものである。抑えた筆致ではあるが、狭い基地での隊員同士の確執なども素直に冷静に描写してあって、著者の科学者としての律儀さを窺わせる。

国の第1次観測隊の計画では、元々越冬の計画は無かったらしいが、これを極秘のうちに越冬隊を残すように変更させるべく各方面の了解を取り付けた内輪話も興味深い。また、第1次の越冬を終って「宗谷」に収容された時、観測本部は悪天候を理由に宗谷の氷海脱出を最優先させ、第2次越冬隊は送り込まないと決定したが、この時の前越冬隊長としての憤懣やるかたない気持ちも正直に記述されている。(犬の“タロ”、“ジロー”騒動もこの時のことである)。

南極観測開始から既に半世紀経った。今では南極ツアーも一般的になってきている。日本からのツアーは300万円以上だそうだから、超極細生活の小生にはまるで呼びではないが、ウルグアイ政府・南極研究所が募集しているツアーは現地発着で1,000ドル程度らしいから、3年前から勉強を始めたスペイン語に一層の磨き(?)を掛けて50年来の夢を是非実現したい。1958年刊岩波新書。

(2007年1月記)



[「山書の小溪」目次に戻る](#)

[『トップページ』に戻る](#)